

# 令和4年度 第1回学校運営協議会及びコンプライアンス委員会議事録

R4.7.4 (月)

静岡県立沼津聴覚特別支援学校

## 1 学校運営協議会 (9:30~11:00)

(1) 運営委員任命状の伝達 (各運営委員へ)

(2) 参加者の紹介 (自己紹介)

[参加者]・運営委員 5 人、手話通訳者  
・本校教職員 10 人



[欠席者] 1 人・・・沼津市第五地区東連合自治会副会長 様

(3) 会長の選出 (互選) … 沼津市泉町町内会長 様に決定。

(4) 本年度の学校経営計画について (別紙資料を基に説明)

校長：運営委員の役割、学校教育目標・重点目標等について説明

学部主事等：学部等の教育目標、重点目標について説明

※ 参加した運営委員から、学校経営計画等について承認が得られた。

(5) 運営委員からの御意見・御感想 (及び御質問)

(委員 A) 久しぶりに学校の様子を見た。(新型コロナの影響により。) 子供のかわいいところや笑顔が見られた。幼稚部は、楽しそうな雰囲気、遊びながら学んでいた。教員と一体感 (通じ合い) が感じられた。そういう気持ちを持ち続けて成長につなげることが大事なポイントだと思う。学部が上がるにつれて笑顔が少なくなるのではと心配。教員と子供が互いの気持ちをつかみ合いながら学ぶのは良いこと。(学校が嫌にならないように…) 気になったこととしては、金岡保育所との交流は良いと思うが、それ以外の保育園とは交流がないのか? という事だった。聴覚障害の子どもを知らない子がいるのは心配。交流を広げてみてはどうか。小学部は、理科などで体験しながら知る方法に加えて、視覚化する努力をすれば分かりやすい。一番悩むのは国語ではないか。苦手な子が多い。読解力の向上ができるか。できれば大学進学につながる。中学部については、生徒が一人だけでびっくりした。厳しい。しかし、教員と生徒が本当に通じ合って理解し合っていた。高等部の生徒たちは、自分の得意な面、心配な面もあると思うが、励まし合って、競争意識を持ち

ながら、取り組むことが大切。努力をしてハンデを乗り越えていく。自己の障害を理解し、他者にも理解を求めていく。自信を持てば大丈夫。また、集団生活を学ばせてほしいと思う。

- (幼主事) 交流に対する御懸念について…金岡保育所とは、指定園交流として年間20回交流を行っているが、その他にも、幼児の居住地にある保育園等と居住地園交流を年間2回行っている。(地域の幼児と触れ合ったり、市町の人々に本校の幼児を知ってもらったりするため。)
- (副校長) 交流籍校交流は、小学部・中学部でも行っている。
- (小主事) 読解力の向上が大事なポイントであることは全教員で共通理解し、研修も積み重ねている。読解を活かして書く活動にも励んでいる。交流については、三校交流(本校・五小・沼津視覚特支)というものもあり、運動会や駆け足運動等を共に行い、交流している。
- (委員 B) 久しぶりに幼稚部から高等部まで見た。自分の子にもこんな時期があったと懐かしみながら見ていた。「こんなこともできたかな。」と思いながら見た。
- (委員 C) 通級や教育相談で見ていた子が、本当に真剣に授業を受けている姿を見て、本当にこの学校があってよかったと感じた。先日、県立総合病院の会議で、ドクターから、手話言語条例があるにしろ、「卒業後には手話やキューサインがない世界に入ってしまう」ということを言われた。学校で手話やキューサインの重要性が高いことは分かるが、聴覚活用の機会をどのような形で設けているのか?
- (中主事) 週に一度、自立活動の授業がある。障害認識も含め、自分自身のきこえを把握しながら、どういう声が聞きやすい・聞きにくいということを学習している。今、新しい補聴器に切りかえているところだが、自立活動において、前の補聴器とのきこえのちがいを感じたり、自分にとって使いやすい補聴器の調整について、地域支援部の教員との連携の下で探ったりしている。
- (高主事) 高等部でも、週に一度、自立活動の授業がある。年間2回、職場実習があって、手話のない世界に入っていく体験をしているが、その中で、UDtalk やロジャーを活用することで、手話だけに頼らずに対応していけるようにしている。
- (副校長) 障害の有無に関わらず、同じように情報提供がされるように考えていくという方向に世の中が変わってきている。
- (校長) 聴覚をいかに使っていくかということも大事だが、生徒たちは、卒業した後も「横のつながり」がある。聴覚障害者同士のつながりというものがある。コミュニケーションの手段としては、手話も必要だ。そこで、あくまでも日本語をベースとして、聴覚口話で授業を行ってはいるが、そこに手話をしっかりつけて学んでいくという対応をとっている。卒業後に社会に出たときに、会社側がどのような情報提供ができるのか、あるいは、こちらからどんな提供を求めていくのか、就労時に進路担当が会社側と話し、「こういう情報提

供のしかたもありますよ。」「手話通訳を頼むならこういうところを窓口にしてこういうことをやってくださいね。」というような説明をしている。UDtalk（音声文字化ソフト）を活用したり、メモを活用したりしている。聞いただけでは抜けていってしまう情報をどうやって残しておくのかということにも取り組んでいる。聴覚だけを、あるいは手話だけを使えば良いということではなくて、トータル的に判断し、手段を選択して使える力をつけていきたい。

- (委員 D) 久しぶりに授業を見たが、幼稚部では小集団で教員と子供の距離が近くて、一つ一つ丁寧に指導していると感じた。一週間に一度の交流のときに30人くらいの集団に入って、リズムの速い活動をするのは、あの子たちにとっては少し大変だろうと思った。交流が終わって母親のところに向かう子供たちの様子を見て、母親との関係性が分かった。年長になると、友達との関わりをどうしたら良いのかという問題があるが、マスクをしていると表情が分からなかったり、何を言っているか分からなかったりするので、マスクをするというのは、あの子たちにとっては大変なことだと思った。小学部・中学部は、1対1の授業があつて、ずいぶん人数が減っているのだなと思った。(以前、幼稚部の交流で会った) 懐かしい子が授業を受けている様子を見て「大きくなったんだな。」と実感した。高等部は、教員の話をしっかり聞こうとしていた。

- (副校長) マスクについては、顔が見えないということで2年くらい課題になっている。
- (幼主事) つい最近まで、子供たちもマスクをして生活をしてきた。母親の中には、口元が見えるマスクを作ってくれて、互いに口元が見えるようにという配慮をしてくださっているケースもある。ここ最近、やっとマスクを外すことができたので、子供たちの笑顔が増えたと思っている。マスクを外すことで、子供同士が話者の口元を注意深く見るようになり、元に戻ってきているように思う。見る力・聞く力を育てていきたい。

- (委員 E) 初めて聴覚特別支援学校の授業をじっくり見た。校長の説明の中に、主体性という言葉が出てきた。幼・小・中・高の各学部も同様に「自ら」とか「主体的」といったことが大事にされているが、少人数の指導になると、教員の手がかり過ぎることもあるのではないかと感じた。子供たちが任せられればなしになってくることが多い。少人数の指導の中で、子供たちの主体性をどう育てていくのかという目で見させてもらったが、ヒントがいくつかあったと思った。4歳児のクラスで、文字を使っていた。文字をダイレクトに教えるというよりも、コミュニケーションツールとして利用していることがうかがえた。それを見ながら、子供たちが自信を持って教員とやり取りをしていた。高等部のパソコンの授業では、生徒が自信を持ってパソコンを操作していた。「主体的とはどのようなことか」というのは難しいと思うが、一つのヒントが、自ら使いこなせるスキルなのではないか。「できることがある」と

ということが、主体的に物事をやっていくベースになると思う。手話ができるとか、耳から聞こえてくることが理解できるとか、「できること」を一つ一つ増やしていくことが主体性につながっていくと思った。本校が、地道に日々努力していると思うが、それが子供たちの自信になっていくのではないかと思った。中3の生徒が、見学者が多数いても、しっかり話をしていた。また、高等部の生徒が実習のこと、パソコンのことに自信を持って取り組んでいるのを見ると、子供たちがここで暮らす何年間のうちに「できること」が増えていくことが主体性につながっていくと思ったので、更に積み重ねていってほしい。交流に関しては、私も第五校区に住んでいて、運動会にいつも一緒に参加している。コロナ禍で、そういう行事もなかなかできなかったのではないと思うが、コロナの流行が収まったら、今まで以上に三校交流を進めていただきたい。私は国語の教員免許を持っていて、「読解」の話をしたときにドキッとした。聴覚障害を持っている子たちの国語の授業で、読解力をどう高めるかというのは、(普通小中学校より)さらに難しいことなのだと思った。自分が普通学級で子供たちに読解力を身に付けさせることに大変苦勞をした。そこに、障害という条件が加わるとさらに難しい。先生方の日々の苦勞が伝わってきた。私に分かることがあれば、一つでも二つでも伝えたいと思っている。

(副校長) 本日は、久しぶりに参観をしていただき、本校の教育活動について御意見やヒントをいただくことができた。これから、学校運営協議会の委員の方々には、それをいかに地域につなげていくか、さらに、どのようなことができるかという視点を持っていただき、第2回の協議会で、また御意見をお聞かせいただければと思う。

(校長) 一年間かけて、いろいろな情報をいただきながら、地域の方々と連携しながら、この学校で子供たちを育てていきたい。  
学校運営の基本的方針を承認していただけるか。

(各委員) 承認する。(全員賛同)

## 2 コンプライアンス委員会 (11:05~11:30)

[参加者]・運営委員 5人、PTA 副会長、手話通訳者  
・本校教職員 13人

[欠席者] 1人・・・沼津市第五地区東連合自治会副会長 様

(1) ①不祥事根絶に向けての取組について (副校長：別紙資料を基に説明)

### ②補足説明

生徒指導課長より

〔児童生徒との携帯電話による連絡〕

- ・「やらない、きかない、教えない」の3つを基本とする。連絡方法は学校が指定しているメール（Yahoo!メール）を使っている。緊急の場合は、学校携帯を使用している。個人のアドレス、電話番号は教えない。SNSによる交流はしない。

〔児童生徒との面談や相談について〕

- ・面談は、日時・場所・参加者が、全員に分かるように計画し、事前に主事や学年主任に報告し、実施している。緊急の場合は、周りの教員に言って、情報共有をしている。
- ・面談の状況が分かるように場所を決め、プライバシーことではない限り、ドアを開けるなどして様子が見えるようにしている。
- ・異性の児童生徒に1対1で対応しない。同性であっても、可能な限り基本的には複数人で対応するようにしている。
- ・面談の内容は記録に残し、周りの教員や保護者に伝えるようにしている。

〔教職員の自家用車への児童生徒の乗車について〕

- ・禁止している。最近2年間は、新型コロナウイルスの影響によって、部活動で外に出ることも少なかったが、コロナが収束して部活動を積極的にやるようになって、引き続き、教職員の車には乗せない、乗らせない。大会時の怪我等の連絡は、学校携帯を用いる。

情報教育担当（総務課）より

学校の魅力を伝えようとする、情報の外部への流出のおそれがある。有用性と危険性が背中合わせである。どこまでやってよいか、どこからはいけないかの基準を共有するようにしている。

〔肖像権について〕

各家庭の意向を確認した上で、ホームページやおたよりで（写真を）使わせていただいている。判断に迷う場合には、一人の職員で決めずに、複数の職員で合議してから管理職の決裁を得るようにしている。

〔情報の管理について〕

先般、他所では、市から業務委託された会社の社員が「市民の個人情報が入ったUSBをカバンの中に入れて飲酒し、紛失する」という事案が発生した。情報を持ち運びしやすいものに入れて外に行くことは、本校ではない。どこかに情報を持っていかなければいけない場合には、パスワードのかかる端末を用い、管理職の許可を得てから行っている。

〔GIGA スクール構想〕

児童生徒に一人一台ずつ端末が配られているが、事前に指導して、児童生徒の判断で操作して情報が外に出ないようにしている。

(2) 取組についての御意見・御感想（及び御質問）

- (委員 C) 7月と11月に「職場の雰囲気づくり」を実施しているのはすばらしい試みだと思う。
- (委員 D) 保育園でも人権に関する研修を行っている。(言動についての注意等) 個人情報保護についても気を付けている。施設可能な場所で管理している。
- (委員 F) 個人情報の管理について、大変な中で努力してもらい、ありがたい。
- (委員 B) USBメモリについては気になっていたが、説明を聞いて安心した。
- (委員 A) 聞こえない生徒たちが悩みを抱えている時に、担任以外で相談できる人・組織があるか。
- (養 教) 養護教諭が保健室でいつでも相談を受けるようにしている。月に1回、スクールカウンセラーが来校するので、必要に応じてカウンセラーにも入ってもらって、相談を受けている。保健室だけで相談が終わらないように、必ず学部や管理職に相談し、子供にどのように対応していくかを確認しながら、丁寧に対応している。
- (寮務主任) 寄宿舍でも、担当が決まっているわけではないが、例えば、女子生徒は女性指導員に個別に相談できるというような体制はとっている。
- (委員 E) 人権については、かなり意識しながら子供たちと接しているのではないかなと思う。一般的に、部活指導の時に人権感覚が薄れてしまいがち。勝利至上主義というのは(本校ではないだろうが)、スポーツの指導で熱が入ってくると、頭ごなしに「おい、こら！」と怒鳴ったりするようなことがあり得る。職員室でも日々話題になっていることではないかなと思う。本校の場合、「きこえ」の問題で、子供たちを振り向かせるために少し身体に触れてしまうといったことがあると思う。上の学部に行くほどその点で難しい状況にあるのではないかな。色々なことが難しくなっていく時代。教員も苦労していると思うが、人権に関しては、研修で深めていってほしい。不祥事根絶については、私も色々苦い思いをしているが、これをすれば不祥事がなくなるという決め手はない。色々なところでいろいろなことを試したが、「なぜこんな人が…」という人が不祥事を起こす。沼津市の教員をやっていたが、恥ずかしながら、ここ数年、教員の逮捕者が何人も出ている。彼らの中には、日頃、子供たちからも保護者からも信頼されている教員もたくさんいたが、なぜそのようなことになってしまったのか…なかなかその根を断つのは難しい。自分自身が心掛けていて、有効な手段だと思うのが、職員室の風通しを良くして、教員同士が何でも言い合えるようにすること。それが不祥事根絶のために一番大切なことではないかな。例えば、家庭で嫌なことがあった時に、「まったく、うちの〇〇はもう！」というようなことが職員室で言える雰囲気であること。
- あるいは、受け持っている子どもの指導がうまくいかない時に、他の教員に相談して、「でも、あの子はこんな良いところがあるじゃないか」などと話

し合う中で、気持ちが落ち着くといったように、風通しの良さが大事である。「本校の強み・魅力」についてグループトークを行って、「うちの学校はこんなところが良いよね。」と言い合えるのは素敵なこと。教員同士が仲良く、色々なことが言い合えるようなチームとなり、互いに高め合うことが不祥事を起こさない集団になることにつながると思う。

(校長) 不祥事根絶・コンプライアンス順守については、今年4月初旬に県教育委員会関係で逮捕者が続出して、教育長から緊急のメッセージがたくさん出された。その中で、各学校で「自分事としてとらえるためのグループワーク」をなささいというものがあり、本校でも、少人数に分かれて、「なぜこういうことが起こったのか」「どうすれば良かったのか」についての話し合いを行った。全体でやると意見を言う人と言わない人がいるが、小グループだと、みんなが意見を出し合えるので、大変良かったと思っている。特別支援学校に限らず、全ての小・中学校でも行ったと思う。お互いに、相手がどんなことを考えていて、どんな人なのかを知る機会が少ない。以前は、飲食を共にする会があって、「この人はこんな人なのだ」と理解を深めることもできたが、この2年間は、全くそういうこともなく、仕事場だけのつながりになってしまっている。横のつながりを深めていくことが大切だと思う。1年間経った時に、本校では不祥事がなかったと笑顔で話せるように取り組んでいきたい。